

ノースカロライナ州の高校教育現場を見学して — 高校理科教育および教員の勤務実態を中心に —

鳴門県立鳴門高等学校 教諭 渡邊敏夫

1. はじめに

今回のGPSPに参加するにあたって、研修する内容として事前に考えたのは主に次の2点である。一つは、ノースカロライナ州の高校における理科教育の実態(カリキュラム、クラス編成、授業形態、授業内容の水準、実験の頻度や取り入れ方、実験の際の安全管理、コンピュータの利用状況および評価方法など)について調べること、もう一つは教員の勤務実態および生徒の放課後や休日の過ごし方を調べることである。

これらのことを研修テーマにしようと考えたのは、私自身が理科(化学)の教員であるため、高度な科学技術や研究レベルを誇るアメリカにおいて高校段階での理科教育およびそれを支える教員の实態について強い興味を持っていたことが理由である。これらについて調べることで、理科嫌いを増やし続けている日本の高校理科教育のあり方を考え直すヒントになればと考えた。

2. 研究の方法

ノースカロライナ州のSylvaにあるスモーキーマウンテン高校に4日間滞在することができたので、そこで調べたことをもとに報告する。スモーキーマウンテン高校はその地区の入学希望者全員を入試無しで受け入れている公立学校であり、特別な進学校というのではない。ただし、他の高校の状況は調べていないので以下に報告する内容がノースカロライナ州の高校について一般的に言えるというわけではない。

研究方法としては、実際の授業をできるだけ多く観察すること、教員にインタビューして話を聞くこと、生徒に配布するガイダンスブックの内容を調べることおよび生徒に対するアンケートにより調べることにした。

3. 研究報告

a. スモーキーマウンテン高校の理科教育の実態

次に挙げる点がその特徴であり、日本の高校とは異なる点でもある。

①少人数制。

どのクラスも生徒は20名程度であり、一人一人に目が行き届く。これは実験の際の安全管理にも有効である。

②選択の幅が広い。自分の進路、興味、能力にあわせて選択可能。

単位制であり、各学年でさまざまな授業を選択できる。たとえば、単なる生物Biologyの他にノースカロライナの野生N. C. Wild lifeなども選択できる。また、同じ化学でもレベルの違う授業が3つあり、自分に合わせて選択できるようになっている。さらに優秀な生徒向けに大学レベルの授業AP Chemistryもある。ただし、選択するには理科教師の同意や推薦、テストの合格が要求されるものもある。

③生徒は規律正しく、授業に集中している。教師の力量は高い。

90分授業という、ハードな授業であるにもかかわらず、生徒は静かに集中して授業に取り組んでいた。これは単位制であり合格点が高いこと、生徒の目的意識が高く、自分の興味や必要度に応じて選択していること、あるいは土地柄などもあるだろうが、教師の力量も大きな要因であると思われる。教員は生徒を飽きさせないよう工夫したり、満足させるレベルの授業をするよう努力していると思われる。

④テストや宿題が多い。

テストは頻繁に行われている。関数電卓の使用も可。宿題もほぼ毎回出されている。これにより生徒は授業内容の復習をきちんとすることになり、学習内容が身に付く。

⑤教科書の内容のレベルは高い。

教科書は大きくて重いのが欠点だが、内容は豊富でレベルは高い。理論的な分野について特に詳しく説明がなされている。カラフルな写真や図を多く用いており、興味をひく工夫がなされている。有機化学や高分子などの取り扱いが少ない。問題の解法についても詳しく解説されている。教師は全部を指導することはできないため、取捨選択することになるが資料としての

価値も高いと思われる。能力の高い生徒は自分でどんどん読むことによって高いレベルの知識を得ることができる。

⑥成績評価の基準をはっきりさせ、生徒や保護者に周知させている。

各教科で統一して評価基準を決めている。合格点は70点で極めて高い。化学担当の教師であるボビーさんの評価基準は次のとおり。ペーパーテスト40%、ラボ(実験)30%(なお、実験レポートでは何を使ってどう調べるのか、結果の数値等をかかせる。さらに実験中にぐるぐる回って観察し、順番通りきちんとやっているか、実験結果についてなぜそういう結果になるのか言わせるなどして評価する)、エッセイと選択式の(計算を伴う)問題30%。こうした評価基準はあらかじめ教師の署名入りのプリントを生徒に配布し、保護者の同意の署名をもらうとのことで説明責任をきちんとしつつ、クレームがつかないよう徹底している。ボビーさんの場合、何もやらないか、授業に出てこない生徒以外は普通は不合格はないとのこと。不合格の割合は平均5%程度であるという。

⑦実験はかなり頻繁に行う。

ボビーさんによると、化学の授業ではクラスにもよるが、1週間に1~2回は実験を行う。時間いっぱい実験するときもあるし、半分の時間を実験にあてるときもある。ただし、実験の頻度については科目、教師、生徒のレベルによってさまざまであるとのこと。なお、実習助手はいないので実験の準備や片づけはすべて教師がやらなければならない。

⑧安全管理は徹底している。

実験の際には必ず前掛けと保護めがねを着用させる。つけないものや態度の悪いものは実験を行わせない。すわってみているだけか教室の外に出す。実験室内には緊急用シャワー、洗眼器、防火用ブランケット、消火器が設置されている。ボビーさんによると、これまで実験の際に事故になったことはないとのこと。注意深く行っているし、安全な方法で行っているからとのことである。

⑨薬品管理と廃液処理の状況

所有する薬品の種類や量はそれほど多くない。実験器具や薬品購入のための予算はここ数年全くないとのこと。もし500\$あれば驚きであるという。電子天秤は1台しかない。理科全体に予算があってそれを各科目

で分け合っている。人気のある科目は予算も多い。薬品の管理は、専用の小さいカギ付きの部屋がありそのたなや薬品庫にカギをかけて保管している。よく使うものについては項目をつくって使用量を調べている。

廃液処理は基本的にはない。流せない場合は業者に來てもらう。

⑩コンピュータの利用は科目によってさまざま。

ボビーさんによると、化学ではサイエンス専用のコンピュータがなく、ソフトもないので特には利用していないとのこと。シュミレーションをラボでやりたいという希望を持っている。コンピュータラボで調べ学習などは行う。天文学の教師はよくコンピュータを利用しているとのこと。

b. 生徒の放課後や休日の過ごし方

①クラブ活動の他、ベビーシッターなどアルバイトをする生徒も多い。共働きの家庭が多く、家に帰っても両親がいないことは問題であるとベンダーガストさんは言う。

②塾や予備校はない。大学が見るのは高校の成績GPAや全米共通のテストSATの成績である。

c. 教員の実態について

①勤務時間

7:45~15:15。朝は早い、夕方終わるのも早い。朝の職員朝会などはない。職員室もない。教員は朝来たら、自分の教室へ行く。そこに自分の机がある。昼休みの時間も特にない。自分の空き時間に昼食をとる。空き時間は一日4コマのうち昼前後の1コマがPlanningの時間となっておりそれを利用する。食べる場所は各棟に1カ所ぐらい職員用の休憩室があり、そこで食べる。そこには自販機やレンジ、トイレもある。印刷室もとなりにある。

教員の仕事は基本的に授業のみであり、担任の仕事など雑用もないので用がなければ放課後すぐに帰る。特に週末の金曜日は教員はジーンズなどラフな服装で学校へ来て、放課後ただちに帰る。

②教員の採用

郡(カウンティ)が採用する。学校の近くに住んでいるときは校長が採用するときもある。場所にもよるが、ノースカロライナ州全体では教員は不足している。都市部ほど教員は足りない。

③異動

異動はない。本人が希望したときだけ異動する。

④定年

ノースカロライナ州では30年勤めたら定年。年齢ではない。例えば22才からノースカロライナで勤めれば52才で定年だが、他の州で10年間勤めた後、ノースカロライナに来たなら通算40年勤めることができる。定年になった後は他の仕事に就くか教員として臨時採用になる人が多い。

⑤給料

4年生卒すぐに教員になると年間26000\$。大学院卒だと28000\$。ベンダーガストさんの場合、他の州も合わせて通算32年間勤めて52000\$。29年以上働くと給料

は上がらない。10000\$くらいのボーナスがある。給料は都市部の方がよい。

⑥クラブ活動の指導

指導しているのは教員のうち半分くらい。指導しなければならないということはない。人気のあるスポーツのコーチは給料をもらえる。額は人気の程度による。

d. 生徒の学校や授業に対する満足度

学校や授業に対する意識を調べるために、次のようなアンケートを2つのクラスで実施した。一つは、最も学習レベルの高い化学のクラスA、もう一つは、世界史のクラスBである。

[対象]					
A : Honor's Chemistry	grade 10 : 4名、grade 11 : 14名、grade 12 : 3名 計21名				
B : World History	grade 10 : 23名				
[アンケートの設問]					
1. Are you satisfied with this school?	Yes		No		
	A : 16 (76%)		5 (24%)		
	B : 21 (91%)		2 (9%)		
2. Are you satisfied with this class?	Yes		No		
	A : 20 (95%)		1 (5%)		
	B : 23 (100%)		0 (0%)		
3. How about this class?	Very hard	hard	moderate	easy	Very easy
	A : 1 (5%)	12 (57%)	8 (38%)	0 (0%)	0 (0%)
	B : 1 (4%)	2 (9%)	18 (78%)	2 (9%)	0 (0%)
4. Can you understand this class's contents?	Yes		No		
	A : 21 (100%)		0 (0%)		
	B : 22 (96%)		1 (4%)		
5. How about 90 minutes' class?	Very hard	hard	moderate	easy	Very easy
	A : 1 (5%)	5 (24%)	14 (67%)	1 (5%)	0 (0%)
	B : 4 (17%)	4 (17%)	13 (57%)	2 (9%)	0 (0%)
6. Are you satisfied with the course that you selected?	Yes		No		
	A : 21 (100%)		0 (0%)		
	B : 23 (100%)		0 (0%)		

(アンケート結果の考察)

学校に対しての満足度は高く、多彩な科目選択制などカリキュラムその他のシステムがうまく機能していることがわかる。授業は90分でかなり長いにもかかわらず満足度が高いことから教員が内容の充実に努めて

いることがうかがえる。また、コース選択に対しても満足度は高く、ガイダンス指導が充実していることを示している。

4. 考察

a. 高校教育全般について

スモーキーマウンテン高校は入試無しで、地域の子どもを全員受け入れる高校でありながら、その教育レベルは高く、生徒の満足度も高い。その要因としていくつかのことが考えられる。

一つ目は、カリキュラムが充実しており、多彩な授業選択が可能であることである。自分の進路や興味・関心に合わせて授業を選択できることにより、学習意欲の保持および向上が期待できる。しかも、自分のレベルに合わせた授業を選択できるというのがさらによい。例えば化学では3つのレベルの化学の授業が開講されていた。わからない授業を聞くのは苦痛であり、学習権の侵害でもある。自分のレベルに応じたわかる授業を選択できることは生徒に達成感や満足感を与えることになると思われる。合格点が70点と高いため、これをクリアするためにもわかる授業は不可欠である。

二つ目は少人数制である。25人以下の生徒であれば生徒一人一人に目が届き、実験などの際の安全管理も行いやすい。机間巡視による個別指導も行いやすい。

三つ目はガイダンス指導の充実である。多彩な授業の中から自分に必要または適応する授業を適切に選択していくのは難しい。後で後悔しないためにも事前に十分な指導・助言が必要である。スモーキーマウンテン高校では専任スタッフ三名がこれにあたっており、十分な成果を挙げている。

四つ目は他の教育機関との連携である。スモーキーマウンテン高校では敷地のすぐとなりにフェアビューエレメンタリースクールがある。サウスウエスタンコミュニティカレッジやウエスタンカロライナ大学の授業の一部を高校で学ぶことができる。

五つ目は優秀なスタッフである。90分授業でありながら、生徒を飽きさせず、力をつけさせるにはさまざまな工夫が必要である。しかも詰め込み式ではなく、考えさせる授業にしようとしている。教師は授業専門であり、それ意外のガイダンス等は他のスタッフが行う。専門分野についてのみ行うというのは生徒にとっても効率がよい。

六つ目は有効な教育行政である。ノースカロライナ州では州統一の試験を行い、学校ごとにその結果を公表している。これは教育レベルの向上につながる。多彩なカリキュラムを支えるための多くのスタッフのた

めの予算、さらにまた、エアコンやコンピュータ、プロジェクター、多くのグラウンドその他教育設備や施設に対する予算が豊富である。教育に力を入れていることを示している。

七つ目は地域性である。この地区はいなかであり、保護者や生徒自体が純朴でまじめな気質を持っている人が多いことが想像される（この地域では外出の際、鍵をかけない人も多いそうである）からである。実際、生徒と対応してもそれが感じられる。都市部の生徒の中には教師の指導に従わない者も多いと思われる。

以上のような要因がうまく機能し、合理的で効率的な高校教育をつくりあげ、満足度の高い学校にしていると思われる。

b. 理科教育について

スモーキーマウンテン高校では、理科の中でも多彩でいくつかのレベルに分かれた授業が展開されている。90分授業でありながらも生徒自身が選択した授業であるため極めて熱心に取り組み、生徒の満足度も高い。合格点が70点と高いためテストを頻繁に行い、宿題を多く出すことで生徒の学習レベルの向上をはかっている。テキストは分厚く重い、写真や図表も豊富で美しくわかりやすい。しかも内容は日本の大学レベルのものまで含まれレベルが高い。

実験は頻繁に行われ、興味を育て学習意欲の向上に寄与している。実験台の配置は講義を聴くときの机の周囲にあり、実験の際だけ移動するため機能的である。実験の際の安全管理は徹底しており、少人数であるため指導・管理が容易である。実験は二人一組で行い、教育効果は高い。90分で時間もたっぷりあり、後の指導も十分に行える。

一方、日本では、理科は必修科目であったり、選択の余地が少なかったり、もともと学習意欲の低い生徒も多い。しかも進学校では大学入試向けの授業をするため、ついていけなくなる生徒が多い。理科嫌いを増やしている。合格点は低い（本校では35点）ため、十分にわかっていなくても単位を認めることになる。教科書は薄くて持ち運びには便利だが、必要最小限の記載しかなく、詳しい説明が省かれている場合が多い。文部省の検定済みのものはどれも似通っており、特色のない教科書となっている。日常生活との関連や詳しい説明、豊富な図表に欠けるため、興味を持てなかつ

たり、意欲のある生徒にとっては物足りないと思われる。

実験に関しては、実習助手がいること、理振の予算があることなどは日本の方がいい。ただし、進学校では大学入試向けの演習問題に時間を費やし、実験を減らす傾向にあるため、それらをどれだけ有効利用しているかという点では少し疑問のあるところも多い。また、生徒実験は4人一組でやる場合が多く、何もせずに見るだけの生徒ができてたりしてしまう。

カリキュラムや教科書、実験などあらゆる点で学ぶべき点は多い。

c. 教員の勤務実態について

スモーキーマウンテン高校では、教員の勤務は朝が7:45からと早い、終わりが15:15までと早いのは合理的である。教員は担任や部活指導などの雑務がなく、家族とともに夕食をとることができる。ただし、自宅で授業の準備をする人も多いそうである。日本では雑用で帰宅が遅くなり、家族一緒に夕食をとれないことも多い。家族に迷惑をかけることになり、子どもの教育上も好ましくない。担任がいないこともあって、あらゆる場面で生徒は自己責任が重視される。今の日本のように、自己責任をとらず担任に依存する生徒が多い状況ではこのぐらいがよいかもしれない。

教員の待遇は特別よいとは言えないが、授業を見た限りでは優秀な人材が多い。教科書をなぞるような授業はできないため、授業自体がよく考えられて準備されている。パソコンやプロジェクター、ビデオなどの教育機器をうまく利用していると思われた。話によると授業のよくわかる教員が尊敬され、好かれるそうである。

5. 終わりに

今回、幸運にもノースカロライナの学校を見学する機会を得て、多くのことを学ぶことができた。とりわけ驚いたのが生徒の熱心さである。日本では私語をし

たり、居眠りをしたりする生徒も多いが、今回訪問した学校ではそれらのことは考えられなかった。生徒や保護者の学校や教師に対する信頼感が感じられた。しかも生徒自身がしっかりしているように思われた。日本では自立心や責任感の乏しい生徒が増え、担任に依存する生徒も多い。保護者も子どもに対する教育力は低下している。授業態度がよくなかったり、十分な学習ができていなくても単位を認めてしまう場合が多いため、ますます勉強しないという悪循環に陥ってしまったりする。無気力な生徒が多くなったのも事実だが、授業がわからないまま放置されていることも大きな要因である。

ノースカロライナのように単位制で、自分の進路や興味、レベルに応じた授業選択ができるようになればそれらはかなり改善されるように思われる。また、日本では大学入試制度が高校教育に大きな影響を与えている。アメリカのように高校時代の成績を重視する制度であれば、高校で予備校のような授業をしなくてもすむ。理科であれば実験観察を十分に取り入れたじっくり考えさせる授業も可能であると思われる。

ノースカロライナの学校を訪問して、改めて日本の教育の問題点を考えさせられた。まずは、学んだことを生かせるよう自分のできることから実行して少しずつでも改善していかなければならない。また、GPSPの目的の一つである継続的な学校間交流のために具体的な行動をしなければならない。たとえば、教員間、生徒間でのメールのやりとりを手始めに大きく発展させていかねばならないと思っている。

今回のGPSPへの参加にあたり、たいへんお世話になった大阪教育大学の米川先生、鳴門教育大学の小野、喜多各先生、鳴門地区他からのGPSPに参加の先生方さらにアメリカ側のECUのドン・スペンス先生、スモーキーマウンテン高校のマイク・ペンダーガスト、ボビー・ヘンダーソン各先生、WCUの先生方をはじめ関係する多くの先生方に深く感謝いたします。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル（2002年8月16日－8月29日）

鳴門市北灘中学校 教諭 小 濱 直 弘

8月17日（土）

日本時間の8月17日（土）16時15分に満員のノースウエスト航空70便は関西国際空港を離陸した。その前の手荷物検査でも、トランクを開けられてチェックされるなど、まだ、昨年9月11日のテロ事件を引きずっているような警戒のため、不安の旅立ちであった。

そして、現地時間17日、到着予定時刻15時30分より少し早く、12時間のフライトを終え、ノースウエスト航空のハブ空港であるデトロイトに到着した。そして、我々鳴門グループは、大阪・広島グループとここで分かれて、ノースカロライナ州最大の都市である、シャーロットにノースウエスト航空の国内線に乗り換えて1時間45分のフライトで19時前に到着した。ここで、WCU（ウエスタンカロライナ大学）の Dixi（ディクシー）教授ご夫妻の暖かいお迎えを受けた。そして、大学の大型バンと鳴門教育大学の小野先生のレンタカーに分乗して、大学のあるノースカロライナ州のマウンテン地区のカロウィーへ4時間のドライブの予定でハイウェイを一路走り始めた。途中、日本に進出していない Captain D's というシーフードのファーストフードで夕食を食べた。アメリカの食事の量の多さに一同驚いた。夕食後、再び、ハイウェイを走って、大学のゲストハウスに着いたのは、次の日になっていた。

8月18日（日）

深夜に大学に到着したが、翌日は時差ぼけの中、早朝に起床し、大学のカフェテリアで朝食を食べた後、Dixi夫妻のご案内でブルーリッジ・パークウェイを走り、日本では低くてなだらかな山脈と教えているアパラチア山脈を見ながらドライブし、Graveyard Fields（グレイブヤードフィールド）のピクニックハイキングにいった。きれいな溪谷にはたくさんの方が訪れていた。滝壺で泳ごうとしたが、あまりの水の冷たさに断念した。溪谷で食べた、SUBWAYのサンドイッチはおいしかった。

このドライブで一番の収穫は、アパラチア山脈を見られたことであった。最高でも2,037mのミッチェル山

であるが、イメージ的には日本の南アルプスのように山が幾重にも重なる山脈であった。

帰ってきてから、大学内を散策し、売店で大学グッズを購入した。アメリカの大学はこれでもかというくらい自校のキャラクターグッズを売っている。これが、後にハイスクール・ミドルスクール・エレメンタリースクールにも自校グッズがあることを知り、日本の学校にも参考になる事業と思った。

夜は、Penny Smith教授のホームパーティーに招かれた。山の中の一軒家の豪邸であった。ゲストが何か食べ物を持ち寄るパーティーであった。日本に来たことのある人の話を聞いたりした。このパーティーで広島から来ている WCU の日本語の先生である谷口先生と出会った。いろいろと通訳をしてくれて、これからの研修の参考になった。

8月19日（月）

朝、トランクに荷物を詰めて、大学のゲストハウス、マジソンホールをチェックアウトしバンにトランクを積み、近くの Cullowhee Valley（カルウィーバリー）Elementary Schoolを訪問した。キンダーから8年生までの650人の生徒がいる学校である。日本でいうならば幼小中が一緒になった学校である。平均学年3クラスの規模であるという。歓迎がすごかった。朝食をメディアセンターでPTAの方のご厚意により用意していただいた。メディアセンターの充実ぶりも日本とは大違いである。後に、訪問したミドルスクール単独のフラット・ロックミドルスクールと比べても、小学校らしい飾り付けであった。専門の職員の人が出て、ランチタイムの後には本を低学年の子供に読んであげていた。これも、ミドルスクール単独の学校とは違う点であった。

また、体育館で歓迎会を開いていただいた。事前にネイティブアメリカの踊りの練習を音楽の先生にいただき、生徒と共に参加した。ネイティブアメリカ（このあたりではチェロキーインディアンが有名）の博物館や保護地域には今回の研修ではいかなかったが、

カルウィーバリーの学校にはインディアンの歴史や使っていた石器も展示してあった。アメリカ先住民族であるネイティブアメリカの勇敢な踊りを白人の子供たちが継承していることにアメリカの何でも受け入れる心の大きさに感銘を受けた。その後も、昨年度に発表会をしたとはいえ、新学期がはじまって間もないのに、数々の民族衣装を用意し実際にそれを着て、アメリカ本場のフォークダンスや世界各国の踊りを披露して歓迎してくれたことに感謝する。また、今回は鳴門グループのみの訪問ということで、阿波踊りも披露してくれたので、私たちも飛び入り参加させてもらった。しかし、日本の着物や浴衣をアメリカ的なファッションで着こなしていたことに新たな日本文化の素晴らしさを実感した。

また、体育館の設備にも驚いた。体育館の設備は、バスケットボール仕様になっている。これは、どの学校でも自校のキャラクターを床に描き、バスケットボールの本場アメリカならではの体育館であった。得点板もオール電光掲示板であった。さらに、電動で収納される階段式の長いすがどの学校でも完備されていた。これは、日本ではお目にかかれない代物であった。このカルウィーバリー校のみに緞帳付きのステージが体育館の横面にあった。これも、日本の常識では考えられないことであった。

この、歓迎会の後、8年生の生徒の案内で、実際に授業を見せていただいた。まずは、ART（美術）の授業、美術の時間のルール説明を行っていた。次に、8年生の数学の基礎コースの授業を見学した。分数の計算や電卓を使った授業をしていた。完全に能力別に分けているようだ。しかし、生徒たちは、真剣に受けていた。後にわかったことだが、州のテストに合格しなければ、ハイスクールに進学できない。落第してしまうという運命が待ち受けているので真剣そのものであったのである。次に2年生の算数と国語の複合的な授業を見学した。アメリカのお金のコインを見ての足し算やカンガルーの絵を見ての足し算や質問に答え、色鉛筆で色を塗るといった作業の時間であった。2年生だけあって、見学していても知っている英単語のみだったので理解はしやすかった。最後に5年生の国語を見学した。内容は「URASHIMA TARO」であった。浦島太郎英語バージョンである。ここで、先生から「日本語で浦島太郎をお話してください」といわれて参加

したが、ノースカロライナの生徒に「助けた亀」や「むかし ー むかし」という日本語を一緒にいっただけで終わってしまった。

授業後は、カフェテリアでのランチの見学と実際にランチを食べた。その量のすごさにアメリカをここでも実感した。しかし、ここでの団体行動の素晴らしさは、オリンピックでの開会式等のアメリカのいい加減さしか知らない私たちに、昔のよかった頃の日本を思い出させてくれた。これは、宗教の違いなのか、徴兵制がある国とない国の違いなのか。この、小さな時から習慣づけられているノースカロライナの教育のよい点を学んで帰ってきた。

午後からは、Smoky Mountain（スモキーマウンテン）High Schoolを訪ねた。日本の中3から高3までの4年間を学ぶハイスクールだが16歳から車での通学がOKであるとか自由があるようで以外と約束ごとも多いようである。

校長先生の説明で校舎案内をしてもらった。広大な敷地に近代的な校舎や建設中の校舎、ミドルスクールよりも芝生がきれいなグラウンドを見ると日本の学校が古ぼけて見えてしまう。また、教育内容も日本でいう普通科・農業科・工業科・商業科・家庭科・情報処理科・福祉科など単独校なのにいろんなことが学ぶことができる総合的なハイスクール、日本の高校とは大きく違っているようだ。

また、能力別のクラス分けで大学の内容をすでに学習している生徒もいるようだ。一方では、卒業作品で、家を建てそれを売っているという。そのスケールの大きさにも驚いた。学校にしながら清掃の仕事の職業体験をしている生徒もいたり、キャリアインフォメーションセンターがあり、専門の先生がいて、生徒の将来を決めるアドバイスを受けられるという。先生は授業に集中し、生徒を支える専門のスタッフが常駐するという分業ができあがっている、ノースカロライナの教育であった。

しかし、日本よりかは景気のよいアメリカでも不況のためにスキル（技能）がないと不利であるという。これは、世界中どこでも同じなのだと思う。

スモキーマウンテン高校を見学後、自然に恵まれたWCUの反対側の山の上にあるノースカロライナ州がほこるNCCATを見学した。徳島県でも現在新しい研修センターが建設中だが、この計画をした人に事前

に見てもらいたかった素晴らしい現職教員が研修できる授業改善センターである。5日間泊まり込みで、技術的よりも教師の原点に戻りリフレッシュして現場に帰れるようプログラムを組んでいるという。さらに費用は無料であるという。それゆえにやる気のある人が参加しているという。また、企業とタイアップしたコンピュータの研修もあるという。この落ち着いたリゾートホテルと同じような設備と環境の中で研修できれば、研修が終わって学校現場に帰った時に今まで以上に生徒のために教育できるであろう施設であった。

見学後、NCCATのホールでのWelcome Receptionが18時30分からあるので、その間、夕食を外で用意してくれた。簡単な食事であったが決してレストランでは食べることのできないバーベキューランチであった。その時に、日本から語学留学に三重県から来ている横浜国大生の榎本君に出会った。ここに来てから合う二人目の日本人であった。日本人はここにはほとんどいないと谷口さんから聞いていたので何かほっとした。

レセプションは、本当のウェルカムパーティーであった。いつ始まっていつ終わったかわからないレセプションに、これがアメリカ式なのかなと勝手に納得した。これから、お世話になる学校の先生やホームステイ先の先生とのご対面があったが、私のお世話になるヘンダーソンビルのフラットロックミドルスクールの先生は来ていなかった。なぜだと思ったが、この後の移動で大学のあるカロウィーからヘンダーソンビルまでの移動の遠さに来れない訳が納得した。徳島と神戸間ぐらいある距離はあったように思った。

ただ、通訳のサイモンズさん（日本人の方）には会えて不安が少し解消した。しかし私たちが踊った「いい湯だな」は本当にノースカロライナの先生方に理解してもらえたのだろうか。未だに疑問である。レセプション終了後、WCUグループは大学地区とヘンダーソンビル地区に分かれて、学校研修を行うことになり、私は、上記のように予想以上に遠かったヘンダーソンビルの宿泊先である長野県の白馬か原村のペンションみたいな、BED & BREAKFAST The Waverly Innという宿に深夜に到着した。この移動はとてもハードだった。そして、明日、初めて訪れるフラットロックミドルスクールへの準備をしてからとても大きなフワフワのベッドで寝た。

8月20日（火）

朝、起きて、朝食を食べるにあたって、朝食の注文の仕方がわからないという事態に直面した。ここは、小野先生の説明で何とか切り抜けたが、普通のホテルでは経験できない体験ができた。後に、通訳のサイモンズさんに宿まで送って来てもらった時に、「こんなよい所に泊まっているんですね」と言われて、このBED & BREAKFASTの宿は日本でいうリゾートホテルのような、のんびりと悠々と過ごす人が泊まる所であるといわれて思わず納得した。また、私の部屋の窓を開けると日本国国旗がたなびいている。なぜかというと、日本からの留学生が半年滞在した時に、朝起きたら国旗が見えたら安心すると思ってオーナーさんが部屋の前に飾ってくれたということもわかった。

朝食後、プール先生が迎えに来てくれたが、朝食の準備が遅く、先生に待ってもらえないので、後から小野先生の車でいくことにした。宿から10分ぐらいでフラットロックミドルスクールに着いた。道中は、林の中に転々と住宅があるととても環境のよい校区であるようだ。学校に着いた時は、ちょうど、保護者の方の送迎ラッシュの時間でその車の多さに驚いた。

学校に着くと、事務室でビジターカードをもらい、音楽室のプール先生を訪れた。その教室の入り口にはWELCOME MR. KOHANMAの歓迎の張り紙がしてくれていた。日本からメールを送り続けても返事がなく、本当に受け入れてくれるのか心配していたがその不安は一気に吹っ飛んだ。

早速、1時間目はプール先生の金管バンドの6年生の選択授業を見学した。入学して10日ぐらいなので、授業はあまり進んでいない。自分で選んだ楽器を購入しているようだ。その新しい楽器で音を出す練習をしている。この授業で、参考になったのは、卒業生のハイスクールの生徒がボランティアで参加していたことだ。ハイスクールの授業の一環で単位になるそうである。生徒も、困ったことがあったらそのハイスクールの生徒を頼りにしている。1単位時間は40分であった。5分間の移動時間で次の6年生のクラスが移動してきた。このクラスは木管バンドのクラスである。この時間で気づいたことは、ある生徒について先生が追ってきたことだった。この先生は特別クラスの先生で、この生徒が問題をおこせば授業から生徒を連れて行くために常にどの授業にもついていているようだ。他の生徒は

この生徒をまったく気にしていないようだ。特別視もしていないようだ。

6年生250人の内バンドの授業は75人が選択しているとのこと。授業は2週間同じ時間に続けてあるそうだ。日本とは大きく違う時間割の組み方であった。また、音楽はノースカロライナ州のテストの必修科目でないが、レポートを提出させているそうだ。これは、国語の読み書きのテストの対策のためにどの教科も実施しているそうだ。

このプール先生の授業の後、プール先生のあき時間にフラットロックミドルスクールの案内と教育課程等についてお話をしてもらった。ヘンダーソンビルの4中学校で一番多い830人の生徒数があるそうだ。教員数は55人いて、これ以外にカフェテリア等の職員がいると教えられた。

また、先生の勤務についても聞いた。校長先生による勤務評定が年に2回あり、新しい授業内容を工夫しているかを見るそうだ。教員免許は、5年ごとに4回の授業と校長先生の面接によって更新するそうである。ここも日本とは大きく違う点である。

さらに、学校内でも先生方の中で、同僚が選ぶナンバーワンティチャーという表彰があり、プール先生が昨年度選ばれたそうだ。桶と賞金をくれたそうである。

学校内の廊下にある鍵付き生徒ロッカーや自動販売機や事務室や先生用のメールボックスや日本製の印刷機がある印刷室や校長先生や教頭先生の部屋を見学後、カフェテリアで昼食をとった。生徒は自分の好きな昼食を購入して食べているが、教室からの行き来は並んでの団体行動をとっている。食事をしながら勉強をしている者がいたり、30分しかない食事の時間だが生徒は楽しい時間だといっていた。

ランチの後、プール先生の隣のARTの教室でOlmsted先生の授業に参加した。7年生の生徒が次の時間に「魚拓」を作成するので、用意していた本校の生徒が7月末に実施した「底引き網体験漁業」のビデオを見てもらい魚について紹介した。フラットロックはノースカロライナ州の海からはるか離れたマウンテン地区に属するので、魚といえば川魚か切り身の魚しか見たことがない生徒がほとんどらしい。そのせいか、日本の中学生が学校の前の海に魚をとりにいったビデオを見てもらったが、網が船にあがって魚がピチピチはねる所が映ると驚きの声があがった。次の時間に本物の魚に

黒の絵の具を塗り、魚拓を作成する事前指導にちょうどよいと授業に招かれたので、生徒にとっては興味をより深くした授業になったようだ。ビデオを見せた後、生徒が自ら手をあげて質問をしてきた。海の魚も珍しいが、日本人を見るのも初めてでこちらも興味しんしんであるみたいである。日本の場所、日本の学校、学校の時間、日本のお金のことなどすべてに興味があるみたいである。遠慮なんかせずにどんどん質問をする積極性が日本の生徒よりも備わっているようだ。

次の時間はESL（ヒスパニックの子供たちに英語を教える）クラスを見学し、実際に授業に参加した。メキシコから保護者の方がヘンダーソンビルの名産である「りんご」農家に働きに来ているために、生徒たちもスペイン語しか理解できないのに英語で授業しているこの学校で学習している。そのため、先ほどのARTの時間にいた生徒もこのESLのクラスに英語を習いに来ていたが、質問を彼がしなかった訳がわかった。英語も日本語もわからなければ質問できるはずがない。このフラットロックミドルスクールだけで60人のメキシコから来たヒスパニックの生徒がいると教えてもらった。多民族の国アメリカ合衆国と地理の授業で学習するが、ニューヨークなどの大都市だけの話と思っていたが、ノースカロライナのフラットロックでも、直面している問題になっているとは教科書に載るだけのことはあると思った。詳しいことは、研究レポートで記述したい。初日の最後の授業は再びプール先生の8年生のバンドの授業を見学した。さすがに8年生である。6年生と比べると、本格的なオーケストラである。好きで選択しているだけにその素晴らしさに感動した。演奏している曲は、「アメリカ国歌」である。なぜかといえば、ここでも9月11日のニューヨーク世界貿易センタービルやワシントン国防総省へのテロ事件があって、9月11日が再び近づいているから演奏しているそうである。国民すべてが「テロショック」と思っているアメリカの国家意識のすごさに驚きを私は隠せなかった。また、注目したのは生徒たちが購入している楽器である。ほとんどが「YAMAHA」製である。made in Japanがここにも浸透していた。

15時にブザーが鳴り、この授業が終わった。これで、生徒たちは放課になる。この後、選考試験によって選ばれた各学年20名限定のアメリカンフットボールやバレーボール等のクラブをする生徒を除いて、大部分の

生徒は一斉にスクールバスや保護者の方の送迎によって自宅に帰る。その様子を見学した。後発のスクールバスに乗る生徒は体育館で待機して待っている。先発のスクールバスが一斉に出発したら、その後発のスクールバスに体育館で待機していた生徒が移動して乗り組み、出発していった。これは日本では決して見ることのできない光景である。その間、保護者の送迎の車も連なっている。この整理をするのは校長先生・教頭先生が中心となった先生方である。事故のないように交通整理をしている。しかし、日本のような自転車通学や徒歩通学は一切ない。日本で、あたりまえのようにある物がないというのはおかしな光景であった。その生徒と共に先生も帰って行っていた。これも、日本では考えられない光景であった。

生徒の帰宅風景を見学後、小野先生と宿舎に帰ってきた。帰ってきて、今日の学校での研修をまとめていると、夕方5時になると宿のテラスで無料のワインとチーズなどのおつまみで、テラスパーティーを始めた。ご招待を受けたが、ここでワインを飲んでしまったら、7時からあるラグビーミドルスクールでのオープンスクールを見に行けなくなるでご遠慮申し上げた。しかし、やっぱりこの宿はリゾートホテルみたいだと再び実感した。

夕方、小野先生の車で、ラグビーミドルスクールのオープンスクールを見学しにいった。日本でいうならば、PTA総会である。同じヘンダーソンビルのミドルスクールであるが何かが違う。同じではないのである。北の端のラグビー、南の端のフラットロック、この違いのせいなのか。授業時間も違うし、チャイムが鳴る、鳴らないもあるし、学校の独自性の違いがそう思わせるのだろうか。

オープンスクールは7時から始まり、体育館で校長先生の話、グループ別のチームになっている先生集団の紹介の後、トランペットに合わせて、胸に手を合わせてアメリカ国歌の演奏が行われた。そして、ここでも9月11日のテロのことが触れられ、日本でいうならば日本万歳のようなセレモニーが行われた。終了後、各教室での先生との懇談が行われた。私たちはその様子を見たり、メディアセンターの専門員の先生にお話を伺ったりした。やはりどこの学校もマックのコンピュータばかりであった。

その後、チャイナレストランで食事をして宿に帰っ

てきたが、アメリカンのチャイナレストランであった。華人の人たちはどこにでもいるということもわかった。

8月21日（水）

朝の日の出は遅い。7時が来てもまだ暗い。天気も快晴。その中を小野先生にフラットロックまで送っていただき、2日目の研修が始まった。この日は、生徒が登校して、カフェテリアで朝食を食べているところを見学した。やはり、朝早く学校に登校するので、朝食抜きの生徒がある程度いたから、朝のカフェテリアでの朝食サービスが始まったそうだ。朝食の大切さと保護者の方の朝の仕事の軽減がアイマッチして生まれた制度なのだろう。少人数ではあるが100人近くの利用している生徒はいた。

この日の予定は、通訳に歓迎レセプションで顔合わせをした、サイモンズさんが来てくれることになっている。その時に、授業内容と研修計画をお渡ししてあったので、その計画によって、社会科の授業に参加して、海からかなり離れた所にあるフラットロックの生徒に周りが海に囲まれた日本を紹介し、学校の前が瀬戸内海（播磨灘）である北灘中学校の生徒が地元の漁師さんの協力で「底引き網漁業体験」をした体験ビデオを見せて、英語と日本語の魚の名前の言い方の違いと日本語には漢字・ひらがな・カタカナ・さらに英語まで使うということを紹介し、さらに魚の漢字を書いてみようという授業を展開することになっている。また、日米（ノースカロライナ州ヘンダーソンビル限定だが）中学生意識調査を昨日に食事をしながらミーティングをした時に実施できたらやってみようという話になったので、8年生（日本の中学2年生）のクラスで実施させてもらいたいと考えていた。

そして、昨日に引き続きブル先生の6年生の金管バンドの授業を見学した。この時に、生徒から折り紙をもらった。昨日に引き続き、ハイスクールのインディペンダントスタジアムのボランティアの生徒が来て、いろいろと生徒たちの楽器の不調な所をみてくれて手助けをしている。

そして、次に8年生のWolfe先生の社会科の授業に参加した。ここフラットロックでは6年生・7年生は社会と理科を同じ先生が教えているようだが、8年生は社会科単独の授業をしている。ちょうど今、ノースカロライナ州についての学習をしていた。地名や農業

や工業等をいろいろな方法でグループになって調べ学習をしていた。最終的にはノースカロライナの地図を意味を持ってケーキやお菓子で作るという。その授業を見学後、私の授業を行った。ビデオを見せて、日本を紹介した。その後で、日本のことについてたくさんの質問に答えた。今回の訪問では社会科の先生方にお世話になったが、日本を教えているが、日本にはいったことのない先生ばかりだったので先生方も興味を持ってきて、生徒たちに呼びかけてきて、活発な授業になった。この後、通訳のサイモンズさんと相談して、意識調査を Wolfe 先生に願って、実施させてもらった。日本の中学生の答えとフラットロックの同じ中学生とではこんなに正反対なのかと思うぐらい極端な結果になった。この詳しいことは、研究レポートでふれたい。

カフェテリアでのランチの後、昨日に引き続き7年生の ART の授業に参加した。本物の魚を使って魚拓 (GYOTAKU) を作成するというので、教頭先生も見学に来ていた。生徒も海の魚を触って驚きまくっていた。日本でもあまりすることのない授業をノースカロライナのマウンテン地区の生徒たちは、楽しみにこの時間を待っていたようだ。私も生徒の一つのグループに参加させてもらった。まずは練習用のゴム製の魚の模型で魚拓を作成し、練習してから本物の魚でおこなった。触れば血が出るし、触った感触も独特な感じがするので、気持ち悪さや怖さもあるけれど、みんな触りながら熱心に取り組んでいた。感想を聞くとこんな楽しい時間はないと生徒も言っていた。また、海にいったことがあると聞いたら、ほとんどの生徒があるらしい。ただ、年に1回しかいけないそうだ。それも車で13時間かけてフロリダや8時間かけてサウスカロライナ州の海に行くそうだ。

ARTの授業の後、7年生の社会と理科の Houck 先生の授業に参加した。90分の授業時間で前半は社会 (7年生はヨーロッパを除く世界地理を学習している)・後半を理科を学習している。先ほどのARTの授業にいた生徒が何人かいて、メディアセンターで日本語の辞書を借りてきていて、いろいろと質問をしてくれた。今まで見たこともない日本人がやってきて、教科書では日本は載っているが、日本と中国は同じだと思っていた生徒が大部分いる中で、自分たちにはあまり関心のない国だった日本のことに関心を持ってくれたことに、

今回のこの交流の意義があると思う。

底引き網のビデオを見せて、日本の世界地図をみてもらい、アメリカの世界地図との違いを聞き、魚の漢字を紹介し、実際に書いてもらい、質問してもらうという授業を行った。

通訳のサイモンズさん (サウスカロライナ州の日本人補習校の先生を毎週土曜日にしている) にお世話になって、日本の学校制度 (授業時間・休日・制服・スポーツ) などの質問がたくさんだったので、日米の学校制度の違いをより詳しく説明してもらった。その中でも、部活動で遅くまで生徒が残っていることに驚いていた。また、高校へ入学するのに入学試験があることに驚いていたが、落第はないということも驚いていた。また、日本で知っているものを聞くと、WCU の日本語の谷口先生が大学の日本語の生徒の学習理由が日本のアニメ (ポケモンやデジモン) を英語の吹き替えでなく日本語でみたいから日本語を学んでいる。決して、日本の企業に就職したいなどの野望はないと聞いていたので、でるとは思っていたが、「ポケモン・デジモン・ドラゴンボールZ」が7年生でも一番多く出てきた。これ以外は、「寿司」や「ヘンダーソンビルにある日本のステーキハウス YOSHIDA (通訳のサイモンズさんに聞くと、とにかく怪しげな曲芸をしながらステーキを焼いてくれる店でこの店にいくと日本人を誤解される店だそう)」そして、ノースカロライナの教科書に載っている「富士山やカプセルホテル」ぐらいしか日本のことを知らなかった。また、先生も、いろいろと協力してくれた。日米違っても社会科の教師は、何にでも興味関心を持っているのは同じだと思った。

授業の合間に、先生方にいろいろお話を聞かせてもらった。その中で、ヘンダーソンビルの有名な産業は何かと聞くと、「りんごの栽培である」という返事が返ってきた。しかし、宿からフラットロックまでの道の中はりんごの栽培しているところはどこにもない。見たいというと、心配しなくても週末にホームステイさせてもらう Smith 先生の家に行く時に見えるので安心した。そのため、メキシコからヒスパニックの人たちが働きに来ていて、生徒数も増加している。そのため、学校も新校舎を建設中であるという話も聞いた。ただ、ESLのクラスがあっても、英語がわかるようになるのには2年はかかるという。さらに、州の法律が変わって、2日間在籍したら、州の統一テスト

を英語で受験しないといけないなど、現実の厳しさも教えられた。また、最先端産業の工場は日本企業も3社がヘンダーソンビルに進出しているが、フラットロックにはないと教えられた。

学校が終わり、通訳のサイモンズさんが宿まで送ってくれた。その時に、前述した、宿のよさをホテルの人から聞いていろいろと教えてくれた。

夕食は、小野先生とラグビーを訪問している阿部校長先生がラグビーの先生から夕食に招待されたので、残っている吉成先生と中水流さんと3人でヘンダーソンビルのダウンタウンを散策し夕食を食べた。ゆっくりと歩いてみると、ダウンタウンには教会がいくつもあり、落ち着いた町並みを見ることができた。約束の時間に宿に帰ってきた。WCUのCasey先生がわざわざ宿までやってきてくれることになっている。しかし、トラブル発生、招待された小野先生らがなかなか帰ってこなかったのだ。3人でCasey先生の質問を英語で受けたが、とっても苦痛の時間だった。この後、無事帰ってきて、このあたりの学校の特殊性について教えてくれたり、私たちの質問に答えてくれた。とにかくWCUの大学の先生は親身になってお世話をしてくれる。本当にありがたく思う。

8月22日(木)

朝、薄暗い中、お腹いっぱいになる朝食を食べて、小野先生に送っていただき、3日目のフラットロックでの研修が始まった。今日の通訳は、鹿児島県出身でノースカロライナに来て20年になる梅野さんが来てくれることになっている。本来ならサイモンズさんが来てくれることになっていたが、都合が悪くなって梅野さんに来ていただくことになった。お子様も学校はアッシュビルの現地校に通い、土曜日だけサウスカロライナの日本人補習校に通っているとのこと。そのため、日本人から見たノースカロライナの教育の仕組みをいろいろと教えてもらった。また、お世話になっているプール先生のご主人にアッシュビルのミドルスクールでお子様が教えてもらったということで、プール先生とも知り合いであることもあり、疑問を持ったことをいろいろと聞いていただき、疑問が解消できたことも多かった。

まず、1時間目は、昨日、お世話になったWolfe(ウルフ)先生の8年生の社会科の授業を見学した。ノー

スカロライナの地図を食べ物を使って表す準備をしている。4人1組のグループを作って、まとめている。ノースカロライナはフラットロックのあるマウンテン地区、シャーロットや州都ローリー(ノースカロライナの発音ではラレー)のあるビッドモント地区、ウィルミントンのあるコースト地区の3つに分かれている。それぞれの地区を色分けして、地形や都市の特色を表して食べ物で表現するために準備しているようだ。特にグループを分ける時に、ヒスパニックの生徒たちだけのグループを作っている。英語よりもスペイン語が得意な生徒に地名や場所を覚えさせるために、興味あるお菓子作りで覚えさそうとしているようだ。喜んで計画をたてていた。

次のグループはノースカロライナの地図を使って、町の物語・町を捜す課題を先生が与えて、地図の読みとりをしながら問題をだして、地名をグループで覚えている。グループによって課題が解決すればさらにレベルアップしている。

2時間目は7年生担当のYoung先生の授業に参加した。昨日のHouck先生の時と同じくARTの授業にいた生徒がいた。「底引き網体験漁業」のビデオを見せて、魚の漢字について授業をした。この授業では用意していた漢字を書いた用紙をOHPにYoung先生がやいてくれ、前に大きく拡大して投影された漢字を生徒が喜んで写した。生徒の感想は、今までの中で一番難しい作業だと言っていた。漢字は絵の様なものと感じたそうだ。Young先生も熱心に授業に協力してくれた。漢字をOHPで拡大したことによって予定外の授業になったが、魚の漢字を書いてもらうことによって、英語の魚の名前とビデオで見た魚が一致してくれたと思う。ARTでいた生徒も漢字を書くということは初めてだったので、違う日本紹介になって、喜んでいた。

カフェテリアでのランチの後、3時間目は8年生担当のMaggie先生の社会科を見学した。同じ8年生担当のWolfe先生とチームが違うため、ノースカロライナ州を調べる授業はしているが、先生によって方法が違う。質問シートがあり、グループ別に調べ学習をして個人シートにまとめている。この授業で、このマウンテン地区に関係のあるチェロキーインディアンを取りあげているグループがあった。首飾りを作ったり、1時間30分でいける所にフィールドワークも行うらしい。やはり、地元の話は生徒も興味があるのは日米共

通であるようだ。もう一つこれも日米共通だったのが、あるグループが学習していると、先にできた生徒の答えを写している生徒がいたら、こっぴどく注意されていたことだ。

4時間目は再び7年生のYoung先生の授業に参加した。再び、魚の漢字について授業をした。こんなにも漢字はアルファベットしかないノースカロライナの生徒にとっては、興味を引いてくれるとは思ってもよらなかった。また、底引き網のビデオ以外に用意していた、本校の日常生活のビデオもみてもらい、日本の中学生の疑問点もいろいろと質問をしてもらった。とにかくフラットロックの生徒に共通することは、日本のことは知らないということだ。しかし、教科書に載っている日本のことについて、本当かどうか確かめたいという疑問は大いに持っている。しかし、カプセルホテルや相撲レスラーは載せてもらいたくない教材である。また、制服や体育の服を日本の中学生が来ているのを見て、いくつかの質問がでた。本当に文化交流が大切であると思った。社会科教師である私も、資料集やアメリカの教材のビデオは今までたくさん見続けてきたが、資料集に載らないノースカロライナの自然や風土や教育などは、この地にこないとわからなかった。そして、たくさんを知ることができた。フラットロックの生徒も教科書に載らない日本のことなんか知らない。これもテレビでは、日本のアニメは放映されても、日本みたいに毎日のようにアメリカがどうしたこうしたとニュースで放映されるが、ノースカロライナに来て、テレビで日本のことなんか放映されない、唯一見たのは、野球のリトルリーグの小学生がアメリカに来て試合をしている放映だけであった。しかし、日本企業のコマーシャルはたくさん見るし、フラットロックにも日本の自動車販売店はいくつかあった。しかし、生徒たちは日本の会社であることさえも知らないのだ。それだけ、日本の自動車はあたりまえのようにアメリカ社会にとけ込んでいることもわかった。その後、Young先生の理科の授業を見学した。その時、気づいたのが、Home workが必ずあるということだ。どの教科も宿題だらけだ。この課題を毎日授業があるから、明日までにしてこないといけないのだ。この点は日本の中学生が楽なのかなと思った。終わりのブザーがなって、グループ別に退室している。これは、よく発表できたグループから退室しているという。それ故

に、明日は一番に退室しようがんばるのだという。横並びが多くなった日本の教育と反対の競争原理はとても参考になった。

帰りは通訳の梅野さんに送ってもらって、宿まで帰ってきた。夕食は、グループ全員でメキシコ料理の店にいった。地元の人の評判の店だけあって、おいしい料理であった。帰ってきてから、WCUのDixie先生が来てくれて、ミーティングが行われた。

8月23日(金)

ついにフラットロックでの研修の最終日を迎えた。今日の夜から、ホームステイになるので、トランクを持って、プール先生に迎えに来ていただき、フラットロックに向かった。今日の研修は、コンピュータの授業を見学することをプール先生にお願いして加えてもらった。Fregtag先生のコンピュータの授業を見学させてもらった。もう4日目なので、生徒も気軽に英語で話してくれるようになった。まずは、6年生25名の授業だが、エレメンタリースクールの時から、コンピュータを学んでいるので、操作を学習するというよりも、コンピュータで文章を早く打てるようにキーボードのタイピングの練習が中心になっている。さらに、自分に与えられた課題に対しての回答を書いて、その文章をFregtag先生に電子メールで送る練習をしていた。コンピュータはミドルスクールの必修科目で毎日45分の授業が実施されているそうだ。技術家庭の一部ではなくコンピュータとして独立しているようだ。ハイスクールに進学するためにはコンピュータのテストに合格しないと進級もできないという。だから、わからないところがあれば生徒は手をあげて先生を呼んで、指導を仰いでいる。コンピュータの教科書はこのノースカロライナの他の教科にもいえることだが、とても厚い重たい本で、学校の所持品になっている。そのため、課題が終わればその教科書を各自が本棚からとってきて、キーボードのタイピングの課題をレベルに応じて進めている。アルファベットしかないので日本語のワープロよりかはシンプルなはずだが、その練習プログラムは完璧にできていると思った。ちなみにコンピュータはすべてマックであった。マックの方が使いやすいそうだ。

5分の休憩時間で次の6年生25名の授業が始まったが、5分の移動でこられない生徒がいた。座席が決まっ

ているので、いない席の生徒は当然チェックされていた。この点は厳しい。さらに、ARTの先生が生徒を連れてきた。理由を聞くと、ロッカーの鍵が開かずに遅れたから先生が連れてきたらしい。日本と違い、この生徒管理はとてもしっかりしている。また、授業中、トイレにいきたい生徒には先生の許可が必要で、用紙に氏名と時間を書き、首に付ける許可カードを下げて出て行くようになっている。日本のように、授業中いなくなり捜索しないといけない生徒は誰もいない仕組みになっている。

次に障害児学級のクラスの授業に参加して、魚のビデオを見てから、日本から持っていった「おさかな天国」のCDを一緒に聞いた。魚が船から引きあげられはねる姿を見て、興味をもってくれた。おさかな天国の歌も「さかな」「さかな」といって喜んで繰り返して歌ってくれた。設備も充実し、広い部屋で学習できる環境は個性をのばす教育ができていると思った。CDが気に入ってくれたのでプレゼントして帰ってきた。

次は校長先生と教頭先生への挨拶と学校事情をお聞きした。フラットロックミドルスクールは今年から、校長先生が変わった。校長先生は海の近くのミシシッピの方からおいでになったそうである。そのため、本校からは私で3人目の教師がフラットロックを訪問したが、フラットロックから本校を訪問した先生がフラットロックを退職し、他の州に移られてしまったので、途絶えてしまった。交流の今後についてお聞きしたら、どんどん生徒同士の交流を電子メール等を通して交流していこうと校長先生の方からおっしゃってくれた。協定書よりも大切なのは交流をもっと活発にしていかなければならないことだと強く感じた。また、本校が指定を受けて研究している環境教育のプロジェクトで日米中学生の意見交換を行ってほしいとお願ひしたら、「積極的に申し出てください」と了解を得ることができた。

他に、成績の評価の仕方やスペシャルクラスの設置やヒスパニック対策をお伺ひした。その成績の評価の厳しさの話を聞いて、ノースカロライナの生徒は家庭でも勉強しなければ学校の勉強についていけないと聞き、日本の進んでいる道と正反対に進んでいるノースカロライナの教育について、昔のよき時代の日本を思い出させてくるような気がした。しかし、ヒスパニック対策は今直面したヘンダーソンビルの課題であると

思った。新しい学校を建設することを考えているが、まだまだ先の話だという。多民族国家アメリカは英語がしゃべるようになる教育は十分対応しているが、その対応以上に職を求めてアメリカに流入をし続けるヒスパニックの人々がいる。アメリカも不況であるというが、ここヘンダーソンビルは不況ではなく仕事があるから、流入をしてくるのだそうだ。最近では、ワンクッションおいてカリフォルニアに入国し、ここヘンダーソンビルに来ている人たちも増えているそうである。このような詳しい話まで校長先生から聞くことができた。

また、鳴門教育大学の小野先生から、「School Improvement Plan」をいただければもらうようにといわれていたので、お願いしたらGipのフロッピーをいただくことができた。さらに、鷲の写真のついた「Staff Handbook」と「Student Handbook」もいただくことができた。このStudent Handbookは日本でいう生徒手帳である。Home workを書いて帰るなどどの生徒も購入して持っていたので、今後の日本も導入できる素晴らしい物と思っていたのでいただいてありがたかった。

このお話の後、校長先生と一緒にカフェテリアでランチを食べた。生徒の様子を見ながら、食べている。その途中、校長先生が持ち歩いているトランシーバーに連絡がはいった。校長先生は学校中を巡回しているから、トランシーバーで連絡を教頭先生たちと取り合っているということだ。ランチの後、校長先生の巡回について回らせてもらった。おもしろいことをしているからといって、連れて行ってくれたのは、8年生のWolfe先生の社会の授業だった。今日は、教室でなくサイエンス室でおこなっていた。理由は、昨日計画していたノースカロライナ州の地図をケーキやクッキーを使って実際に作っていた現場だったからだ。ノースカロライナ州を3地区に分けて、州都ローリーなどの代表的な都市やアパラチア山脈などの代表的な地形などをお菓子で表現している。計画以上にグループ別に上手に作っていた。それを、先生が生徒にこれは何かと質問しながら、評価している。校長先生はどこの学年が何をしているか、今日の特色ある授業は何かをきちんと把握しているとのことである。

その後、7年生のコンピュータの授業を見学した。7年生は授業に参加する機会が多かったので、日本の

ことを調べている生徒もいて、コンピュータの画面に日本の国旗を書いてくれたり、Japanと書いてくれたり、いろいろとサービスをしてくれた。コンピュータの学習の内容は先生が作った本をもとにして、データベースを作ったりしているそうだが、本日の授業は、6年生と同じように与えられた課題に対して、答えを書いて先生に電子メールで送り返すことをしていた。その後は、6年生と同じように教科書を使ってタイピングの練習をしていた。

しかし、授業のちょうど半ばで突然警報ブザーが鳴り出した。避難の合図だそうだ。先生を先頭に1列になって、運動場に避難した。ぞくぞくと全校生徒が避難してきた。カフェテリアの職員の人たちも避難している。運動場に集合したら、日本のように点呼することもなく、おとなしく立ったまま待っている。10分間警報ブザーが鳴り続けた。この間、点検が行われていたようだ。それにしても生徒は慣れているなと思ったら、フラットロックには昨年9月11日の同時テロ以降、7回も爆弾を仕掛けたといういたずら電話があり、そのたびに避難したそうだ。だから、慣れているということらしい。教室に帰る時も生徒はおとなしく帰っていった。教室に帰ると、すぐにその時間の授業は終わった。しかし、途中のままで、次の授業へ生徒は移動した。

次に8年生のコンピュータの授業を見学した。エレメンタリースクールからずっとコンピュータを学んできたので、もうほとんどの生徒がコンピュータを自由自在に扱うことができている。そのため、勝手にヤフーを開いてインターネットをしたり、遊んでいる男子生徒もいた。しかし、課題はきちんとこなしていた。7年生も8年生もコンピュータの授業は毎日あるそうだ。だから、ブラインドタッチで打てる生徒もたくさんいるようだ。

先ほどのコンピュータの7年生の生徒が次の時間は体育に行くといっていたので、運動場に見学に行った。運動場はアスファルトの400mトラックの中に芝とはいえない草が一面に生えているグラウンドで「キャッチフラッグ」ということをやっていた。アメリカンフットボールを蹴って、陣取りを男女合同でそれも大人数でやっている。当然、体操服はない。好きな服装でおこなっている。とにかく、楽しくやっているのが印象的だった。

最後に、7年生の社会科の授業を見学した。このフラットロックにまでWCUのLois先生が見に来てくれた。25人の生徒でアフリカとアジアについて学習している。まず前の時間の授業の課題の質問をしてから、本を生徒に読ませて、先生が最後に説明をする授業であった。とにかく生徒が手をあげて発表する授業であった。

この授業で、4日間のフラットロックでの研修が終わった。とても有意義な研修をすることができた。緯度的に日本と変わらないが、高地にあるとはいえ、まだまだ暑い8月末であるが、学校は全館クーラーがきいて学習しやすい環境である。これは、日本でも冷房化を進めていこうという計画ができたようだが、できたら実現してもらいたい課題であった。お世話になったブル先生にお礼を言って、2日間ホームステイをお願いする、フラットロックのSmith先生の車で先生の家に向かった。とても親切にいただき、素晴らしい思い出を持って日本に帰ることができたホームステイであった。先生の家のはまわりは、りんご畑ばかりのところ、ここで初めて、ヘンダーソンビルの特産物りんごを見ることができた。

8月24日（土）

Smith先生夫妻に、鳴門第二中学校の阿部校長先生と一緒にアッシュビルにある「ビルトモアエステイト」に連れて行ってもらった。アッシュビルの町を散策し、ブルーグラスのコンサートにも連れてもらってもらった。

8月25日（日）

Smith先生夫妻に集合場所であるアッシュビルのコンフォートインまで送っていただき、感謝の挨拶をして、お別れをした。日本に来た時には同様以上のお礼をつくさなければと思った。そして、WCUからのグループと合流し、大学のバンで州都ローリーまでハイウェイを5時間かけて走った。その道中、着いた時も走ったが夜遅かったためによくわからなかったが、バンが道路を下っているのがよくわかった。マウンテン地区はいかに高地にあるかがよくわかった。その道中、当初私の研究課題だったアメリカ農業の適地適作を自分の目で見るということを解決しなければならない。マウンテン地区は「りんご」を中心に作っていた。本

来ノースカロライナ州は昔から「たばこ」を生産し、そのたばこによって州が潤っていたのだ。そのたばこ畑を見つけて、自分の目で見るという使命を解決しようと寝ないでずっと起きてカメラを構えていたが、5時間の道中、見ることはできなかった。

本日の夜は、ホテルに着いてから、明日のサマリーカンファレンスに向けての編集作業が待っている。鳴門グループは大学地区とヘンダーソンビル地区に分かれていたため、ホテルでまとめるしかないのだ。車の中でも、大学地区の先生と情報交換をしながら走ってきたが、この編集作業はノースカロライナにくる前から徹夜になってしまうよと言われていたが、予想通り、ホテルでそれぞれの研究課題を発表し、それをまとめる発表原稿の編集作業は本当に明け方までかかってしまった。

8月26日(月)

Global Partnership Schools Summary ConferenceがExplorisのホールで開かれた。デトロイトで分かれた広島・大阪・鳴門の3地区が再び集結し、ノースカロライナ州の3地区に分かれて研修した成果をノースカロライナの大学の先生や研修先の学校の先生を交えて、3地区ともパワーポイントを活用し、プレゼンテーションを行った。ノースカロライナ州は大きく3地区に分けられているが、マウンテン地区は鳴門・ピッドモント地区(中央)は広島・コースト地区は大阪とそれぞれの地区の学校で先生方が研修してきたことの発表を聞いても、ノースカロライナ州の教育の方針の徹底ぶり、マウンテン地区の生徒は田舎だからよいのではという懸念は吹っ飛んだ。これも翌日に訪問した州の教育委員会でその教育方針を聞いてノースカロライナ州の教育はこれからの日本の教育の再び進むべき道の検討に参考になった。

今後の課題でノースカロライナの先生から先生間の交流は3回の相互交流で、3年目の今回の研修ではお互いに信頼できるようになった。残る課題は、生徒の交流を深めて、実際に日本の生徒がノースカロライナにノースカロライナの生徒が日本に行き来できる環境を早く作らねばならないとおっしゃった。これはWCUの先生方も強く要望されていた。飛行機の旅費だけ出してもらえれば、マウンテン地区では生徒を受け入れてくれホームステイの費用は無料で結構であるという

のである。このような計画があるので、日本の中学生だったら実現可能だと思う。私たちが訪問した8月末だと実際に学校にも通学して交流することができる。またノースカロライナから日本への訪問は6月なので日本の学校にも通うことができる。可能性のあるこのプログラムが本当に実現してほしいものである。

プレゼンテーション・質問の後、ランチをその場で食べながら、Luncheon Speakerなるお話をLinda先生から聞いた。1970年代に日本に留学した時はまだ戦後を引きずっていた話などを聞いて、日米交流の架け橋となった先生の苦労やこのような研修ができるようになった発展の話を聞くことができた。食べながらだったのでメモもがとれなかったことが残念であった。

その後、アメリカ在住の久保田先生の日米交流の教材の話やMOJICOなるインターネットFAXの宣伝を聞いたりして、予定より早くサマリーカンファレンスは終わった。WCUのパンでホテルまで送っていただき、ここでお世話になった先生方とお別れとなった。また、5時間かけて帰られるそうだ。ここまで一緒に行動してきた鳴門教育大学の学生である中水流さんともお別れである。彼女は再びアッシュビルまで帰り9月末まで研修を続けるそうである。

お別れした後、大阪と徳島のメンバーで、ローリー最大の「ウォール」へ出かけることになった。その大きさに驚いた。日本のスケールとは桁違いの大きさである。人口的にはそう多くない政治都市にこのように大きな「ウォール」があってもハイウェイのインターチェンジが近くにあるから近郊の都市から人々が車でやってくるみたいである。帰る前に集合し、夕食は日本料理の店「歓喜」で食べた。この店はステーキをショーをしながら焼いてくれる店である。ヘンダーソンビルにあった「YOSIDA」でも同じようなことをやっているのだろう。これを見たら、アメリカの人は日本人は変なことをして食べていると勘違いをきっとしていると思う。通訳のサイモンズさんが言っていたのをこのショーを見て納得した。しかし、日本料理店はアッシュビルにもあったし、どこにでもあるのだと感心した。

8月27日(火)

研修の最終日は昨日サマリーカンファレンスが行われたExplorisが創立したチャータースクール「Exploris

Middle School」を訪問した。博物館が作った私立の学校だが、費用は日本の私立みたいにならない。公立校と同じ費用で通学できるという。どうしても、フラットロックミドルスクールと比べてしまうが、少人数で博物館の経営する学校だけに、特色ある教育が行われている。また、一番驚いたのがロッカーに鍵がないということであった。通学のリュックもローカにつり下げたままである。この安心感が画期的な教育ができる要因ではないのだろうか。1学年56名しか入学できなく、実験的な教育も行われているようだが、入学希望者は多いそうだ。これは、まさしく徳島でも2年後に生まれる県立の中高一貫校と何か共通点があるように感じた。通訳してくれたサイモンズさんのお子様も今年からチャータースクールに公立から変わったそうだが、理由は画一的な教育よりかは独創的な教育を求めているからチャータースクールに変えたといっていた。ノースカロライナの保護者も日本よりかは、あらゆる点で恵まれていると思う公立校よりも独創的なチャータースクールを求める人もいくらかはいるようである。確かに生徒に余裕はあった。5分の移動で走り回るフラットロックに対して、途中で15分のブレイクタイム（おやつタイム）があるなど、少人数の利点を生かしている。また、フラットロックにはなかった第2外国語の学習もおこなわれている。フランス語とスペイン語のクラスに分かれているそうだ。さらに、学級での話し合いも機会あるごとに時間が設けられているのも、フラットロックにはなかったことだ。プロジェクト学習が午後からくまれていたのも、フラットロックになかったものだった。どちらが、生徒のためにいいのかという答えはチャータースクールの取り組みが生徒の学力にどう反映していくかによって決まるのだろうと思う。でも、スクールバスのないこの学校

に通学させようという保護者の教育に関する意識の違いは大きく違うから、新しい取り組みであるチャータースクールはますます増えていくのではないかと思った。

訪問後、隣接するExploris Museumを見学し、昼食後、車で移動してノースカロライナ科学博物館を見学した。ここで、ノースカロライナの地形の特色を再確認した。私たちが訪問したマウンテン地区に生息する動植物などを確認して帰ってきた。

最後に、ノースカロライナ州教育委員会を訪問した。さすがに、ここはパスポートを見せなさいといわれるなど州のお役所であると実感した。ここにもテロの影響があるのだろう。いろいろと説明をしてもらった。教科書だけでなく副教材も一同に集めて評価をしているという。他の州ではしていないことをノースカロライナ州は行っている。州知事が教育知事といわれていた人だけだけにその影響が受け継がれているみたいである。インターネット上でノースカロライナのカリキュラムが日本でも見ることができるという。これも、公開されているそうだ。さらに、ノースカロライナ2000校で間違った本や教材やソフトウェアを選ばないように、先生方がその教材等を評価できるようにもライブラリーを作り、このローリーの州の教育委員会に備えているという。

この訪問で、ノースカロライナの研修は終わった。アメリカの教育は自由であるけれど……銃の乱射があるなど、あまり見るべきものはないのではと思っていたが、ノースカロライナを訪問してその考えが間違っていることがわかった。ノースカロライナの教育に日本が見習わなければならないことが数多くあったのだ。現地を見なければ何もわからないということがわかった有意義なノースカロライナでの研修であった。